

平成 22 年 4 月 26 日現在

研究種目：若手研究（B）

研究期間：2007～2009

課題番号：19720112

研究課題名（和文） 日英語における意味・形式・音韻に関するミスマッチ現象について

研究課題名（英文） Mismatch Phenomena in Meaning, Form, and Phonology in Japanese and English

研究代表者

岩崎 真哉（IWASAKI SHINYA）

大阪大学・文学研究科・招聘研究員

研究者番号：90379214

研究成果の概要（和文）：

同族目的語構文、時間メタファーを取り上げ、認知文法の観点から、前者の構文にはどのような動詞が現れ、どのような動詞が現れることができないかに焦点を当て議論した。また、同族目的語の統語的特性、つまり、修飾語をとれるか、受け身可能か、目的語を *it* で指すことが可能かという統語特徴を調べた。具体的には、同族目的語は、主語の発するエネルギー、目的語の状態変化、目的語の対象性の観点から分類されると主張し、これらのパラメータによる同族目的語構文に現れる動詞の認知構造による分類を提示した。

研究成果の概要（英文）：

The present study considers the question of what kind of verbs can take cognate objects (COs) and what kind of verbs cannot, from the perspective of Cognitive Grammar. The present paper investigates the syntactic properties of COs, such as the ability to take modifiers, the passivizability of cognate object constructions (COCs), and the *it*-pronominalization of COs. It is our contention that a detailed classification of verbs that occur in COCs is required in order to capture the relation between the syntactic properties and the modification of COs. While classifying verbs, we focus on three conceptual factors: the force of energy of the subject, a change of state of the subject, and the objectivity of the cognate noun. The study reveals that these three parameters enable us to capture the difference in the interpretation of COs in relation to modification and syntactic tests.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2007 年度	900,000	0	900,000
2008 年度	600,000	180,000	780,000
2009 年度	600,000	180,000	780,000
年度			
年度			
総計	2100,000	360,000	2,460,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：言語学・英語学

キーワード：同族目的語構文・認知文法・構文文法・時間メタファー

1. 研究開始当初の背景

これまでに言語に見られるミスマッチ現象は、多くの研究者たちによって議論されてきたが、日英語を比較したミスマッチ現象を扱った研究は未だ十分であるとは言えなかった。本研究課題では、日英語における意味・形式・音韻のいずれかのミスマッチ現象が見られる時間副詞・同族目的語構文・複合語名詞を扱い、それぞれ次のような背景があった。

(1) 日英語の時間副詞構造について

英語の時間名詞には前置詞なしで副詞として機能するものが存在する。例えば、*Mary will see John some day.* の *some day* に見られるように、前置詞がなく副詞として用いられる時間表現である。それは時間に関わる表現以外の場所や様態、方向を表す表現にも見られる。過去の研究においては、国内では、主に統語論の分野から議論されることが多かった。また、国外の研究では、本研究課題は主に構文文法に基づくが、その枠組みでの研究では、Christopher (1999)があった。

(2) 日英語の同族目的語構文について

同族目的語構文とは *John smiled a happy smile.* のように本来自動詞と考えられる動詞が、形態的に類似の目的語名詞を取る構文を指す。この構文に対して、これまで多くの研究者が言及している。Jespersen (1927) や Visser (1963) は記述的な研究を行い、その後続く研究者の間では、同族目的語が項であるのか付加詞であるのか激しく議論された。高見・久野 (2002) は機能主義的な分析を、Horita (1996) は認知言語学的な分析を行い、単にそれが項と付加詞に二分されるのではなく、動詞によって区分されることを示した。国内・国外の研究を問わず、これまでの研究は主に同族目的語構文に現れる動詞はどのようなものか考察され、非能格動詞が主に出現すると主張されてきた。しかしその研究はまだ十分であるとは言えなかった。

(3) 日英語の複合語名詞について：

例えば、「自由民主党」という複合語では、意味的には「自由」と「民主」が結びつくが音韻的には「民主」と「党」が結びつく。国内外を問わず、複合語の音韻構造に対しては、窪園晴夫の一連の研究が説得的な議論を行っている。

2. 研究の目的

本研究課題の目的は、日英語における意味・形式・音韻のいずれかのミスマッチ現象が見られる時間副詞・同族目的語構文・複合語名詞を扱い、ミスマッチ現象も象徴構造

(Symbolic Structure) の概念の基に説明されることを示し、我々の認知システムが大きく関わっていることを示すことであった。具体的には、時間副詞の研究では、前置詞を必要とせず副詞的に機能する名詞を取り上げ、それに関する先行研究の不備や説明されなかった問題を考察した。また、副詞的名詞類は、項位置に現れることができる前置詞句と一致する、と主張する先行研究があるが、果たしてその主張が妥当であるのか、項位置に現れていても、副詞的名詞類として認められない例はないのか、検討するものであった。特に、同族目的語構文の研究では、その構文に生起する動詞がどれほど認可されるか、また、同族目的語の修飾要素に焦点を当て、それがその構文の認可にどのように関係しているか、さらに、英語の分析が日本語の同族目的語に当てはまるか検討し、日英語における相違点から両言語にどのような認知システムの相違があるのかを考察することが目的であった。複合語名詞に関する研究では、日本語の複合語名詞を取り上げ、その文法構造と音韻構造のミスマッチについて分析した。特に、ネットワーク分析と認知制約が妥当であるか考察し、複合語、文、句の最初の要素が特別のステータスであるという主張を考察した。

3. 研究の方法

(1) まず時間副詞・同族目的語構文・複合語名詞に関連する文献のリストを作成し、その網羅的な調査を行い、まとめた。時間副詞・同族目的語構文・複合語名詞に関する言語データを先行論文からはもちろん、コーパス、小説、雑誌、新聞などいろいろなジャンルから収集した。また、他の大学にしかない図書や、インターネット上でも入手不可能な図書・文献については、現地に赴いて収集・調査を行った。

(2) 上記、3つの言語データの収集と平行しながら、構文文法の理論を習得した。構文文法の中でも研究者により、使用する概念や用語に違いがあるため、研究者ごとに類似点・相違点をまとめた。

(3) 収集した言語データを分類した。

副詞的名詞類については、時間・場所・様態・方向の四つに分類し、さらに、前置詞が随意的、あるいは通常前置詞がつかないものに分類した。同族目的語構文については、非能格動詞であるか、非対格動詞であるか、によって分類した。次に、分類した言語データの中で、先行研究の分析では説明できない

言語現象や見逃されている言語現象がないか検討すると同時に、例文を自ら作成し、英語母語話者にチェックを受けた。

複合語名詞については、次の構造にしたがって分類した(窪園晴夫(1995)『語形成と音韻構造』)。

- 並列構造(チェ'コ スロバキア)
- 組織名+役職名(ボーエ'イチョー チョーカン)
- 人名(ミウラ トモ'カズ)
- チーム名(ガ'ンバ オオサカ)
- 氏名+地位・役職名(クリントン ダイト'ーリョー)
- 地域名+地域をさらに限定する名詞(キュー'ーシュー ナ'ンプ)
- 順番を表す名詞+地位・役職名(ジ'キ ダイト'ーリョー)
- 格関係(ショーソク フメイ)など。

分類した複合語を東京出身者数名に発話してもらい、それらを録音し、Praatで分析した。

それぞれの研究において、英語を最初に分析し、その後それを日本語に適用できるか否か検討した。そして、最後に、行ってきた分析が、我々のどのような認知システムを反映しているのか、ミスマッチというキーワードを基に包括した。

4. 研究成果

同族目的語構文に関しては、まず非能格動詞の区別をなくすべきであるという先行研究を批判的に検討し、その区別は段階性はなすものの考慮すべきであるという主張を行った。その根拠として、第一に、非能格動詞をとった文が容認されるのに対して、非対格動詞は修飾要素によって文の容認度が変わること示した。これは、非対格動詞がこの構文に典型的に現れる動詞ではない為に、文脈の力を借りて容認性を高めていると考えられるが、それはすなわち、非対格動詞は文脈の力を借りないとこの構文に出現できないという、非能格動詞との違いが存在することを提示した。

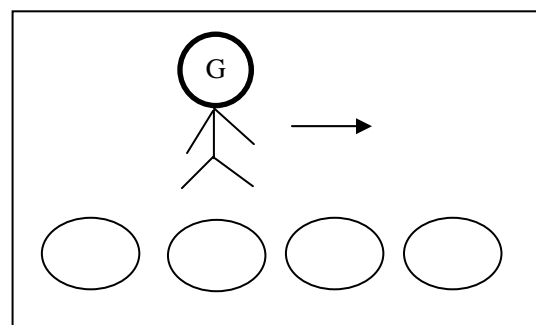
第二に、非能格動詞を持った同族目的語構文は受動文が可能であるが、非対格動詞を持った文は受動文が容認されないという事実から、非能格動詞と非対格動詞の区別は必要であり、またその一方で連続体をなすと主張した。

そこで、同族目的語構文に現れる動詞の特徴を捉えるために、3つのパラメータが必要であると主張した。それは、主語が発するエネルギー、主語の状態変化、同族目的語の対象性である。まず主語が発するエネルギーであるが、これは非能格動詞と非対格動詞の区

別に関与する。つまり、非能格動詞は何らかのエネルギーを発するのであるが、非対格動詞は発しないのである。次に、主語の状態変化のパラメータであるが、これは非能格動詞の分類に関係する。例えば、動詞singは状態変化を起こさないが、動詞smileは起こすと考えられる。最後に、同族目的語の対象性であるが、それは、「動詞によって表される行為が、メタファー的にであっても、主語から分離可能であるなら、同族名詞は対象性があると捉えられる」と規定した。これによって、smileは分離不可能であり、対象性が低いと主張した。

以上3つのパラメータによりさまざまな同族目的語構文の容認可能性の違いを説明できることを示し、各動詞のスキーマのネットワークを提示した。

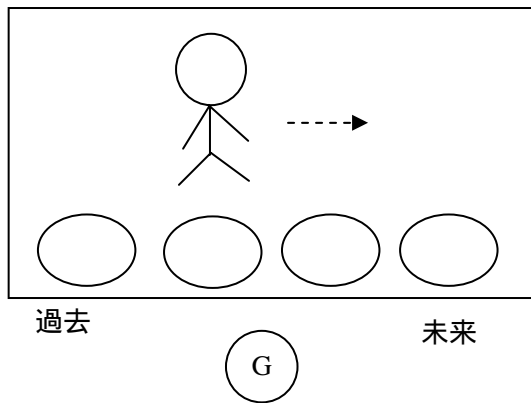
時間副詞に関しては、特に、時間のメタファーを取り上げ、Moore(2006)の分析を日本語の時間表現のデータから再評価した。具体的には、時間メタファーを主体的・客体的把握と直示的・非直示的な観点で分類を行った。そうすることにより、日英語に見られる時間メタファーを統一的に説明することが可能となることを示した。具体的には、従来、時間メタファーは主にMoving Time metaphorとMoving Observer(あるいはEgo) metaphorの2つのメタファーによって捉えられてきたが、Moore(2006)は、Moving Time metaphorをEgo-centered Moving Time metaphorとSEQUENCE IS RELATIVE POSITION ON A PATH metaphorという2種類に分類した。Ego-centered Moving Time metaphorは視点が直示的であるのに対して、後者のメタファーは視点が中立的であるという特徴がある。このMooreの分析であると日本語の「前」も「先」も視点が中立的となるため、「前」のついた時間表現と「先」のついた時間表現の違いは説明できないということを指摘した。そこで本研究では、主体的・客体的分類を採用し、「先週」のような表現ではグラウンドが客体的に捉えられ、「前週」のような表現では、グラウンドが主体的に捉えられると主張した。具体的には、次の4分類を提示した。



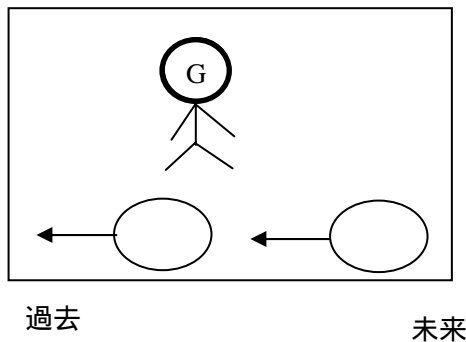
過去

未来

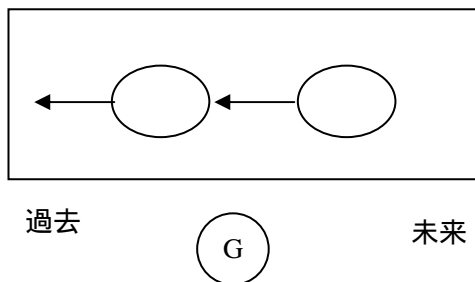
(a) Moving Ego



(b) Moving Observer (Static)



(c) Moving Time (deictic)



(d) Moving Time (non-deictic)

時間メタファーが関わらない副詞的名詞類については、それが自由関係節と関連し、「自由関係節は非顕在的な前置詞をその構造にもつ」と提案した先行研究を検討した。本研究では、コーパスデータを検証し、その先行研究はデータによっては実証的に説明することができないものがあることを指摘した。また、本質的に、なぜ自由関係節（副詞的名詞類にも当てはまる）が、「場所」・「時間」・「様態・方向」に限られるのか、という問題を先行研究は説明しておらず、不十分であることを議論した。本研究では、自由関係節の特異性には特定の構文が関与していることを主張した。

複合語名詞については、それを録音しPraatで分析した。そして、英語の文法構造と音韻構造の不一致現象に対しては、「英語の複合語においては、最後から2番目の要素

がその直前の要素と意味的に結び付きが強くなければ、最後の要素が最後から2番目の要素と音韻的に結びつく。もし最後から2番目の要素がその直前の要素と意味的に結び付きが強ければ、その2つが音韻的単位を構成し、その合成したものが最後の要素と音韻的に結びつく。」という一般化を行った。

一方、日本語の複合語の不一致現象は、無助詞で始まる文や句のネットワークと連続した形態的に同質な句や文のネットワークの相互作用により動機付けられると主張した。具体的には、日本語の複合語が、「明日」や「今日」のような助詞が付かない語や、「夕暮れの教室、花子は静かに本を読んでいた」の「夕暮れの教室」という提示語の後に音韻的区切れがあるという特徴を持ち、かつ、「チーズを食べたねずみを食べた猫」という関係節がいくつも続いた文や、「直子の姉のセーター」のように所有格がいくつも続いた表現が、最後と最後から2番目の要素が結びつく傾向があるという特徴の、2つを合わせ持っている、と主張した。実際、3つから成る複合語、4つからなる複合語を見てもこの傾向がある複合語が多いことがわかった。以上より、裸名詞には共通した特徴があることがわかった。

以上行った分析から、一見ミスマッチに見える現象も、我々の一般的な認知システムの観点から説明可能であることがわかった。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計2件)

Iwasaki, Shin-ya "A Cognitive Grammar Account of Time Motion 'Metaphors': A View from Japanese" *Cognitive Linguistics*, Vol. 20, 2009, 341-366, 査読有

岩崎 真哉 「英語の同族目的語構文の修飾要素について 構文文法的アプローチ」*KES (Kanazawa English Studies)* 26, 2007, 51 - 70, 査読無

[学会発表](計1件)

岩崎 真哉 「英語同族目的語の認知的分析」金沢大学英文学会、2007年12月1日、石川厚生年金会館

6. 研究組織

(1) 研究代表者

岩崎 真哉 (IWASAKI SHINYA)
大阪大学・文学研究科・招聘研究員
研究者番号：90379214